

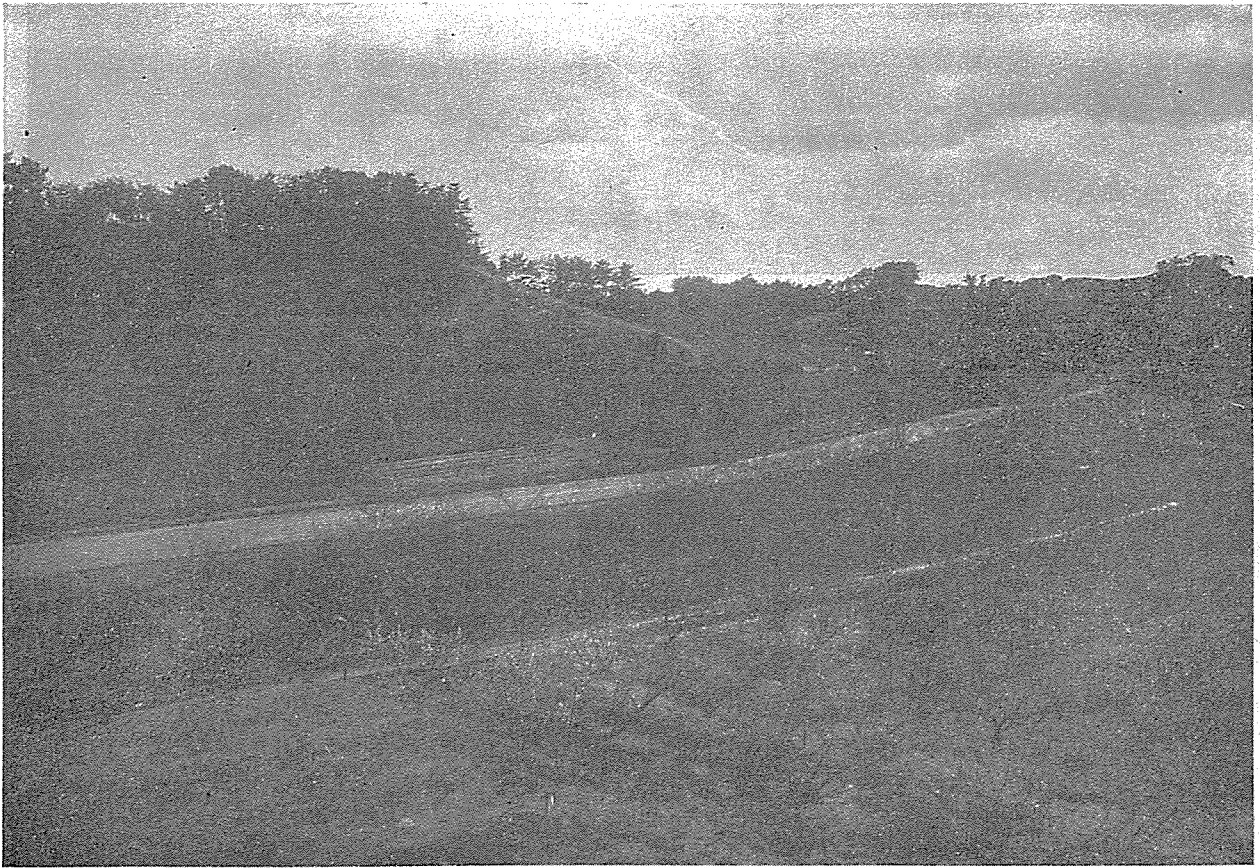
子 里 山 學 報

回一月每
行發日五十

行發日五十月六

號 刊 創

年一十正大



部一の路道學大るた瞰りよ舎校新

阪 大

番九四〇一 } 堀佐土話電
番〇七五五 }

局報學學大西關

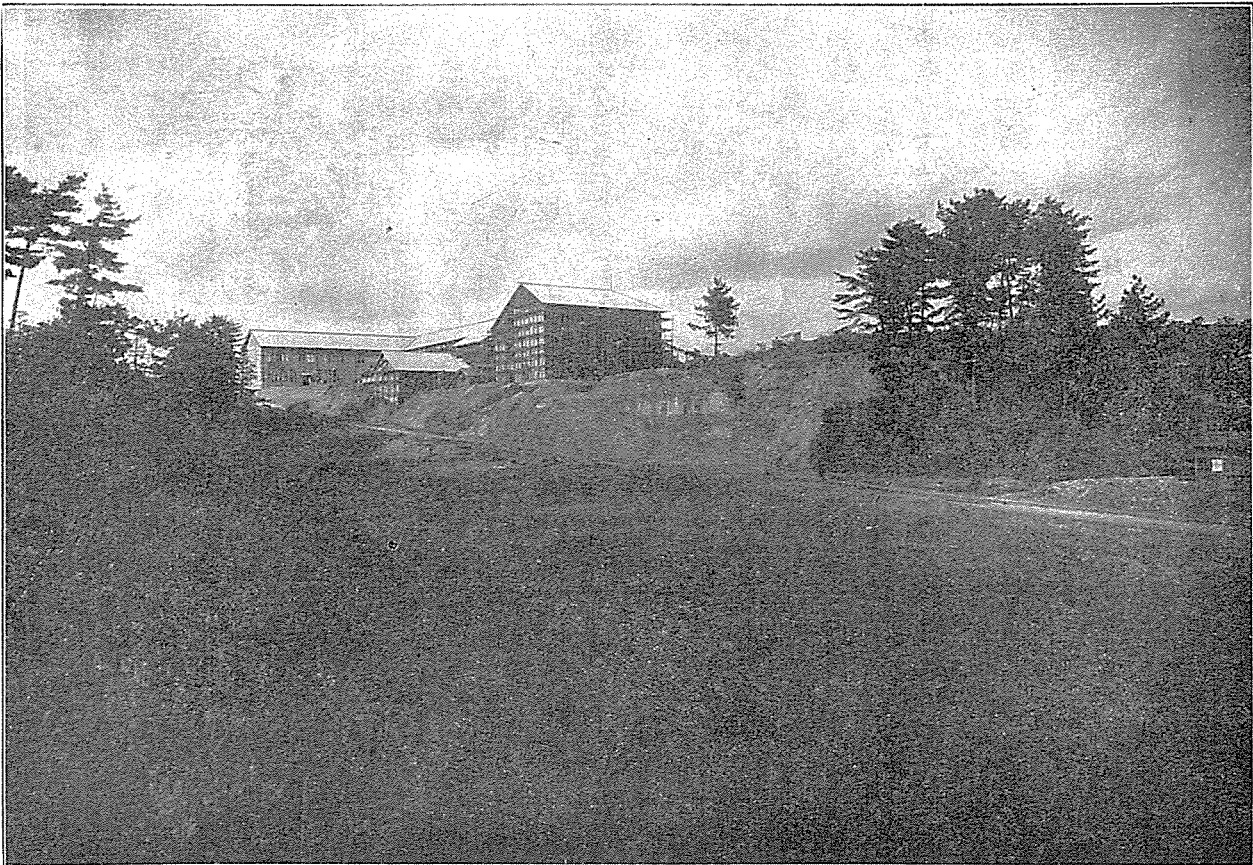
座口金貯替振
番五七八二一阪大

西大 年史資料編纂部
No. _____
62. 3. 25
千代田市・山手町

舎校新の中築建



(一 の そ)



(二 の そ)

千里山學報第壹卷第壹號

目次

- 千里山附近の景(寫眞)
- 建築中の新校舍(同)
- 總理事山岡順太郎氏(同)
- 發刊の辭
- 山岡總理事を迎ふるの辭
- 學說
- 人類争闘則の社會學的考察
- 教授 岩崎 卯一
- 校報—總理事就任—組織一部變更—專務理事
- 辭任—卒業式—進級試験成績—新入學生數—高等研究科面目—新—新校舍一部竣成—新校舍始業式—新聞科設置に就て
- 學友會報—新幹事選出
- 校友會報—春季校友總會—新校友住所氏名—高等試驗登第者—校友逝去—一校友より
- 關西甲種商業學校彙報
- 卒業式—始業式—教諭移動—春季修學旅行—本學年度體格検査—度量衡に關する講話
- 本大學擴張後援會に就て
- 雜錄—佛大使クロード博士來校に就て—高等研究科主催第一回文化講演會
- 編輯餘録

發刊の辭

明治十九年浪速の一角に呱呱の聲を揚げてから我が關西大學が漸く西日本に於ける私學の重鎮としての存在を保つに至つた今日まで三十有六年の時の流れは決して短かいものではなかつた。けれどもその永い年月の間に培はれ育まれ而して出來上つたものが今日の關西大學そのものであることを憶ふならば過程の永かつたことは寧ろ餘りにも當然であると言はなければならぬ。

一朝にして築き上げられた礎の上の建物に果してどれだけの堅固さがあり、どれだけの偉大さを期待し得やう。宜なるかな永きに涉つて繰り返され繼續されて來た生みの悩み、培育の勞、建設の苦闘、それらは今や彼の千里の山頂に屹然と立つて近畿を睥睨する新校舍となつて現はれた。否なそのみではない。外には數千の校友が夫れく社會に重きをなし、内には三千の學生が愛校の調べを奏でながら切磋琢磨に餘念なく、百餘の教授講師亦之が指導誘掖に献身的努力を拂はる。擴張後援會生れて以來財政の基礎頓に鞏固の度

を加へたのみならず、曩に同會の創始者であり會長であつた大阪否我國財界の巨人、山岡順太郎氏を總理事として新たに本大學に迎へることができた。加之數年來の懸案であつた新大學令に據る大學として認可せらるゝことも恐らく茲旬日を出でないであらう。

噫！大正十一年。そは實に永かつた過去と無限の將來とを有する我が關西大學の歴史の上に一大エポックを劃するものとして特筆せらるべき年にあらすして何であらう。而して之を記念せんが爲めに小さいながらも生れ出たものが本誌である。

由來學報は大學に缺くべからざる機關の一つである。學生が一たびその業を卒へて社會に出づるや常に彼等の腦裏を徂徠するものは實に母校の面影である。親しく指導を受けた恩師の温容、同じ學びの窓に、教への露を吸つた同胞のことども、恐らくそは彼等が生くる限り離れることの出來ない最も強い幻影の一つであらう。彼等が制せんとして最も制し難い欲望は隨て此の母校の消息に接せんとするそれであらう。而して此の熾烈なる欲望を充たすに足るの機關は唯一つ學報それあるのみである。

ある。更らに又、學内にあつて螢雪の辛苦に浸る無數の學生に絶わざる刺戟を與へ不斷に之を啓發するものは、實に外に在つて目醒ましき活動を續くる校友の情況であり、赫々として輝く先輩の名聲である。而して此等の報道は唯だ學報に俟つのみである。

大學と校友、學生と先輩、斷たんとして絶つことの出來ない愛着の絲を蒐めて、そこに渾然たる諧調を作り出すことは實に學報そのものゝ使命である。

而して此の使命を果さんがために貧弱ながらも企てられたものが本誌である。かくも深甚なる意義の下に、かくも重大なる使命を負うて我が千里山學報は生れて來た。併しながらそは未だ搖籃の中にある。本誌をして眞にその生れ出た意義に背かしめず、その擔ふ所の使命を完からしむるものは唯だ校友其他の先輩諸氏並に學生諸氏の愛護の力でなければならぬ。

願はくは不斷の援助と鞭撻とを與へらるゝことに吝かならざらんことを。發刊の辭を陳ぶるに當り只管希望して已まぬところである。



書齋に於ける岡山總理事

山岡總理事を迎ふ

大學の使命は眞理の追求にあるとは獨逸流の大學觀であり、大學は人格陶冶の機關即ち紳士を作る所であるとは英國の各大學がモットーとして均しく提唱する所である。眞理の追求が大學の最大使命の一たることには何人も異論のない所である。併しながら、それを以て大學の使命の總てであるとの見解は吾人の直ちに首肯し得ざる所である。大學が人格陶冶の場所であるといふことも吾人の均しく承認する所である。併しながら、若し英國の所謂紳士道が單に八面玲瓏たる好人物であることのみを意味するならば、紳士作出の機關を獨り大學のみに限定する必要はあるまい。

獨逸流の大學觀が特に眞理の討究に重きを置くからと云つて、之を以て大學の使命の總てであると解する者があるならば、それは餘りにも皮相の見に捉はれた者であると言はなければならぬ。

英國流の大學觀が人格陶冶のモットーの上に打立てられてゐるからと云つて、之を以て眞理の討究を輕視するものとの斷定を下さんとする者があるならば、それは楯の半面のみを見て他の半面の存することに想到するの明を缺く

ものと言はなければならぬ。

吾人は憶ふ。眞理の討究と人格の陶冶とは、大學に取つては鳥の兩翼であり車の兩輪である。何れを重とも何れを輕ともなし得べき性質のものではない。若し人ありて本大學の使命奈何を聽かば、吾人は躊躇なく答ふるであらう。右の兩者こそ本大學の使命として互に離すべからざる關係にあるものである。

然らば此の二大使命を完うするの手段奈何。幸にして本大學存立の基礎漸く固く、諸般の設備亦着々として成らんとし、各種専門の學者熱心にその蘊蓄を傾けて學生の指導に全力を注がれ、眞理討究の使命を完うすべく殆ど遺憾なきの状態にある。若し夫れ人格陶冶の點に至つては、茲に萬人の目して批難なしとする人格者山岡順太郎氏を迎へ、總理事として仰ぐことを得るに至つた。氏の人格の光輝が懸て玲瓏として學風に反映し、本大學の使命兩々相共に遺憾なきを得るであらうとは吾人の堅く信じて疑はぬ所である。今新たに山岡總理事を迎ふるに當り、吾人が之に對して期待する所如何に大であるかを陳べ、以て氏を迎ふるの辭となすものである。

學 說

人類爭鬪則の社會學的考察

(F. H. Giddings 教授社會學說研究の1)

關西大學教授 ドクトル・オブ・フ・ソフ・フ

岩 崎 卯 一

(はしがき)

一、進化論の三體系

- A Darwin の生物進化論
- B Spencer の宇宙進化論
- C Bagehot の社會進化論

二、社會進化論の混流

- A Kropotkin の相互扶助論
- B Fiske の嬰兒期の延長論 (以上本號所載)
- C Kidd の宗教信念論 (以下次號掲載)
- D 社會主義と其反對派の二三

三、生存争闘の四型相

- A 反應争闘
- B 生存争闘
- C 應他争闘
- D 調和争闘

四、社會争闘の原則

はしがき

社會學なる大殿堂を、經驗科學の原野に、新に建立せんとして、膠漿を絞りたる思想界の偉人達が、過去半世紀間に、各々體験した學的苦惱は、誠に同情に値するものであつた。實證科學中、最後の位置を占め、且つ諸經驗科學の基礎たるべき本質を有すとして、所謂「近世社會學」なるものを創始したる第一人者なりと、普遍的

に認識せられつゝある Auguste Comte も、學史的地見地より觀察すれば、畢竟時代が生んだ一學徒に過ぎなかつた。即ち、十九世紀の前半に、科學界を風靡した物理學の理論が、偶々其の、當時佛蘭西思想界の動搖中に醸成せられ、

からず、苦悶しつゝあつた Comte の創造的思想を通じて、彼れの胸中に醸成され、稍々系統的構成を作らんとしつゝあつた彼の社會理論中に、移植應用せられたのである。轉て物理學の黄金時代が、過去の黒幕中に葬り去られると、生物學界に於ける Charles Darwin の新理論が、太陽の如く、世界學界に輝き初めた。生物學の春が學界を訪れたのである。Comte までが自己の社會學の著書の題名に用ひたる「社會物理學」なる看板は撤去せられて、十九世紀末の社會學者達は、其の代りとして「社會生物學」なる新看板を掲げ初めた。されど、二十世紀の經驗科學界は、何時までも、Charles Darwin の自然淘汰説を其の中核とする生物進化理論の盲目的承認を繼續する雅量を持しなかつた。Spencer 等の社會有機體説が、世紀末の若き社會學徒の群れから、最早陳腐なりとして、骨董品視せられ始める頃、生物學の地位を僭奪して、社會學徒の人心を收攬し、自家藥籠中のものとせんとの野望を包藏し初めたのは心理學であつ

た。今世紀に於ける社會學派の分化綜合現象は複雑多様を極め、社會學徒の輩出數も著しく増加し、俄かに其の歸趨を見定むる事不可能の様ではあるが、是を學史的地見地から、劃時的に色彩を施すならば、それは、明かに心理學派の全盛と稱する事が出来る。この社會學界の寵兒たる心理學派の關將として、今尚、生存しつゝある社會學徒の中に、其の最も偉大なる者を求めれば、米國 Columbia University の社會學教授 F. H. Giddings を擧ぐべしと出來る。Giddings 教授が、「同類意識」(the consciousness of kind)なる一個の心理的普通概念を提唱し、彼の有名なる大作「The Principles of Sociology」(社會學原論)を學界に提供して、米國の Ward 教授と共に、一躍世界社會學界の權威と併稱せられてから、稀思議にも教授の沈黙が、約二十五箇年間繼續せられた。年若うして、早くも大成したる Giddings は、天才に往々伴隨する悲劇たる、早熟早衰の例に洩れず、一個の悲惨なる「生ける骸」として、學界の一隅に僅に呼吸せりし信ぜられ、彼に多くを期待したる人々をして、悲痛せしむる事久かつたが、其の餘りに長かりし教授の沈黙は、其の實老衰にあらず、彼の學説が據て以て立つ基礎科學たる現代心理學に去來する千波萬波を批判的態度を以て、靜かに考察しつゝあつた結果である。

年に、「Psychology from The Standpoint of a Behaviorist」(行動心理學見地に立つた心理學)の著作を通じて、極端なる行動心理學を提唱しつゝある若き John B. Watson 一派が、活躍せる今日のそれとを比較すれば、現代心理學界は、眞に革命的洗禮を受けつゝありとの形容辭を使用しても、敢て不當過言であると言へる人はあるまい。

彼が「社會學原論」を出版した千八百九十五年から、千九百二十二年の今日迄の、二十有七箇年間、教授の年齢にせば、四十歳の壯年から、六十七歳の今年迄、心理學界に展開せられた進歩の跡は「革命」と云ふ形容詞を以て、評せらるべき程顯著なものであつた。試みに、William James の「Principles of Psychology」(心理學原論)が、千八百九十年に、尨大二冊の著述の形を以て出版せられ、機能心理學の第一聲を擧げた頃の米國心理學界の傾向と、千九百十九

「同類意識」なる心的要素を、社會現象中より抽出し來り、之れを基礎として、築造したる Giddings 社會學の大伽藍が、從來心理學上の tenetic として何人にも慣用せられたる「意識」なる言葉をも、尙ほ曖昧にして誤解を招致し易しとして、該語の使用を總ての心理學著述中より絶対に除去せんと迄主張する「行動心理學」一派が、漸次「意識心理學」の脅威となりつゝある現代に於て、尨からぬ動搖震盪を蒙るは理の當然である。この心理學界の學的推移を、コロムビア大學の研究室より默乎として觀望しつゝあつた Giddings 教授が、若きとき築造したる其の社會學の大伽藍を網維的に小修理する事の徒勞無益なるを觀破し、現代心理學界に於ける最後の歸趨を明瞭に見確めた後、其の根本的改修に着手せんと企圖した結果、絕對沈黙を敢守したのは、流石時勢を見るに敏なる教授の態度として、相應はじきものであつた。

教授が敢守した約四半世紀に亘る批判觀眺的沈黙の間に、現代心理學の學徒達は、意識心理學、機能心理學、行動心理學の諸派を、順次に而かも忙しく送迎した。故に、既に色褪せたる「意識心理學」に立脚したる Giddings の社會學體系が、今日の「行動心理學」の雰圍氣中に、尙ほ、生存權を要求せんとせば、必然、そこに多大なる學說改造の苦悶を經驗せなければならぬ。この苦悶たるや、彼には哲人が仰々毒盃よりも、なほ苦しい事情がある。何となれば、教授が、

社會學史上に、偉大なる足跡を残した點が、意識心理學中の一現象、即ち同類意識現象を、社會學上に移植して、心的一元論的解釋を與へた點にあり、認識せられて居る關係上教授の社會學體系を、行動心理學の理論に基き根本的に改訂することは、或意味に於て、過去に於ける教授の學的生命を死に誘導する恐れがあるからである。この dilemma を脱却せんとして、四半世紀間苦悶した結果、教授は、遂に「行動心理學」の新理論を、今迄自己が掲唱し來つた社會理論を、巧妙に調和することに成功し、其成果凝つて、本年教授が出版せられた『Studies in the Theory of Human Society』(人類社會理論研究)となつて現れた。三篇十六章、悉く社會學理論に關する諸論文の Systematic Collection である。この論文の殆ど全部は私學にある教授の社會學研究室にありて、教授指導の下に、純理社會學の研究に、餘念なかつた頃、「セミナー」で、大學院學生の前で、朗讀し、且つ批評を求められたものである。今、一冊にまとめられて、出版せられたものを見返す時に、又特別の興趣がある。最近、Giddings 教授から、この新著述の全部を日本語に翻譯せよとの特別なる手紙に接したけれ共、新著述中に包含せられたる各論文は、恩師が其の一字一句に、無限の意味を含ませられたる事を知悉するが故に、輕率に翻譯の大業にあたるは、恩師が心血を凝がれたる金玉の文字を、却て瓦石と變ずる憂ひがある。翻譯の大業は他日に譲り、茲には教授の新學說を中心とし、之に自己の見解を加へ、新社會學理論を順次紹介してみたいと思ふ。

物理學が、科學界の覇者として、爾餘の分化科學を、脚下に睥睨したる黄金時代は、

Charles Darwin(1809—1882)の力作たる「種の起原」(The Origin of Species)なる一著書の出版に由つて、脆くも凋落の悲運を招來すべく餘儀なくせられた。精緻なる觀察、豊富なる資料の蒐集、整然たる資料の系統的排列、之等を基礎として、複雑多様な生物界の諸現象中より、彼が抽出したる普遍的法則は、生物進化理論(The theory of biological evolution)であつた。彼の研究及理論は、忽ち學界の注意を喚起し、獨り、彼の生國たる英國學壇を動搖せしめたるのみならず、更にひいては、歐洲大陸の科學界にも、甚大なる影響を及ぼした。實に、彼が生物及び動物心理學上に寄與したる學的功業は、科學界の根本革命と云ふ讚辭に値する程、輝きに充ちたものであつた。是の爲に、生物學の學的地位は、俄然向上し、從來物理學が把握して居つた學界の王者なる地位を奪ふに至つた。

『生物現象中に一貫の理がある。之れ進化的法則である。この進化的法則は、生物界に於ける生存争闘の過程中に、默乎として流れつつある所の自然淘汰の結果に基因する』と、提唱して、彼が大成した生物現象の發生學的考察は、彼れ以後の社會科學者の間にも、幾多の没批判的追隨者を見出さしめた程、彼が投じた石が描いた水の波紋の範圍は廣汎であつた。

生存争闘 (Struggle for Existence) 變化 (Variation) 適者殘存 (Survival of the Fittest) 及び遺傳 (Hereditry) の四法則を綜合したる自然淘汰論 (The Theory of Natural Selection) を提唱して、生物進化の理法を明かにし、其の結果として、從來、稍もすれば輕視された生

物學を、殆ど全經驗科學の中樞神經となす程の、大功業を敢て成就した Darwin も、彼の前に輩出したる偉大なる多くの學徒の遺したる學的業績を、全然無視した譯ではなかつた。彼が壯年時に試みたる世界周遊旅行、彼の言葉を借れば、自然觀察旅行中に蒐集したる資料を、唯一無二の研究對象として、不斷の努力を繼續した結果、何等先人の形而上學的臆説を借らずして、彼の生物進化理論を、全然實驗室より發見したりする觀察を、確實なりとするも、尙ほ、彼が、彼の前に英國の論壇を驚倒せしめたる怪傑、Rev. Thomas Robert Malthus の、人口論の理論的構成を、自己所論の introduction としたる觀あるは、争ひなきことである。

Malthus の大膽なる人口論の發表が、當時の英國人に、いかに多大なる悲觀的情緒を誘起せしめ、彼の人爲的出産制限を肯定せるかの如き口吻が、如何に英國の交際社會及教會の人達を、憤激せしめたかは史上顯著なる事實である。併しながら、彼は未だ、Darwin の如く、更に進んで、生物社會は、全能の神が、地上に創造したる樂園にして、生物は、此樂園裡に、平和的に生を享樂し群住せるものなりとの、神學的説明を普及し來れる宗教家又は人道主義者の信念及宣傳を、全然裏切つて、血の滴るが如き生物争闘の修羅場を、最も慘酷に描き出して、之を生物進化の原動力なりと斷定する程、勇敢に事實の真相を把握し得なかつた。短言すれば、Darwin は Malthus を理解して、而も彼を超越したものである。

Darwin が、彼の生物學實驗室に籠居して

生物進化的法則の構成に餘念なかつた頃、英國の哲學界は、博覽強記の天賦に加へて、倦む事知らざる精力を以て、宇宙進化論の組織に腐心しつゝ、あつた、偉大なる百科全書的一哲學者を所有して居つた。其の哲學者は、自然科學、人文科學、其の他あらゆる學問に、指を染めたりし事なき Herbert Spencer (1820—1903) であつた。彼が「社會靜學」(Social Statics) を著述して、其の結論に『社會は、絶えず變化しつゝ、ある生存條件に適應しつゝ、進歩して行く處の人類本質を、其の中心概念として説明すべきものである』と、記載したのは、Darwin の出世作である「種の起原」が出版せられる九年前の事であつた。此の中樞概念、即ち、社會の本質を、進歩的發達の過程なりと視、其の進歩の原動力は、人類本性の環境 (environment) に對する應化作用 (adaptation) に在りとする觀念は、後に「綜合哲學」(Synthetic Philosophy) の十冊中に、彼が詳細に演繹記述した宇宙進化論の基調を成すものである。「社會靜學」が陽光を見てから五年目に、Darwin の「種の起原」が出版せられたから四年目に Spencer は彼の心理學原理 (Principles of Psychology) を出版した。其の第一版に於て、『生命とは、外界の状態に依り刺戟せられ且つ指示せられる所の、外部事情と内部事情との連絡關係である』と云ふ解釋を初めて發表した。最後に、千八百五十七年四月に、彼は「The Westminster Review」に「進歩、其の法則と原因」なる一論文を寄稿して、彼れの腦中に多年醗酵しつゝ、あつた、進化的法則を公表し、『進化的法則は、宇宙及び其の中に包含せられる總べての現象を通じ

て、顯現するものである』と主張した。斯くて、彼の進化法則の構成を、發生的に考察すれば、相互に多少の連絡を有する三個の命題が、順序的に彼の理論に展開し行けるのを見出す事が出来る。第一は、彼が生物を進化的に觀察し、進歩 (Progress) の應化 (adaptation) を同一視した事である。第二に、生命は、外界の事情と内界の事情との調和に在る事云ふ事を、道破した事である。第三は、彼の哲學を最も特色付ける要點であつて、其れは、彼が、進化を宇宙的事實 (universal fact) と見た事である。

斯の如く、彼の宇宙進化論中に、二個の根本理論が、包攝せられてゐるのを、看取するのである。第一は、不斷の應化作用 (continuous adaptation) の原則であり、第二は、分化及び綜合 (differentiation and integration) の原則である。前者は、有機體と其環境との間に存する關係を考察したものであり、後者は、宇宙間の全有機組織の構造及び機能に關したものである。併しながら、彼は未だ其の時迄は、精力と物質との宇宙的再分配 (the universal redistribution of energy and matter) の事実は、著目してゐなかつた。即ち各物質の單位が精力を其周囲の空間に放射し、而して之を後に吸収し、其經過中に、其各單位内部に於ける秩序的凝集作用と外界に於ける不秩序的分離作用とを續ける事實は、彼が未だ確固として把握し得なかつた點であつた。併しながら、最後に、彼も、物質的變形の始めであり、而も終りである宇宙的平均の理法 (The Theory of Universal Equilibrium) に氣が付いた。

眞理は、必ずしも只一人の獨占物ではない。Spencer が、彼の蘊蓄を傾倒して、築き上げんことをした哲學體系の對象は、宇宙的進化の事象であつた。彼の「綜合哲學」十冊に收められたる無數の資料は、彼が築き上げんことをした宇宙哲學 (cosmic philosophy) の大伽藍を建造する素材に過ぎなかつた。併し乍ら、此の宇宙現象中には、彼が構成したる宇宙的進化論以外に、尙別種の進化理論が現存する事を、彼は氣が付かなかつた。彼は廣大無邊なる宇宙の總現象中より、普遍的法則を抽出せんことを餘り、抽象概念の體系的整序に忙はしく具象世界の現實を熟視する事を忘れ勝ちであつた。現實世界に於ては、前に述べた物質

の普遍的平衡法則は、有機體に對して、「生存争闘」の様相を帯びて示顯する。「自然淘汰」が之である。而して其の生存争闘場裏に於て、最も弱きものは死滅する。此の具象世界の活事實から、生物進化の理法を考究し、儼然たる理論的一體系を樹立したのは、Darwin であつた。

斯く觀じ來れば、進化論なる同一名辭を使用しても、其の進化理論の對象及び法則が、英國十九世紀思想界の二大偉人に依つて、顯著なる相違を呈する事に氣が付くであらう。Spencer は、宇宙進化事象を研究對象とし、其の中から分化綜合の原理を發見した。之に反して Darwin は、觀察の範圍を生物現象にのみ限定し、生物進化を説き、自然淘汰なる法則を創成した。この兩者間の區別は、從來鋭敏なる注意力を有する社會學徒から、確實に認識せられた處ではあるが、社會進化理法を論究する場合には、特に、此の區別を明確

にしておく必要がある。此の二種の進化論の區別を、明確にしなければ、社會の起源、人類歴史又は人類制度等に關する實證哲學的説明、短言すれば、人類社會の理論的研究に突進んで行く事は望まれない事である。

三

『種の起源』に依つて捲き起された學的旋風が、英本國及び歐大陸の學界に舞ひ狂ひ、Darwin の生物進化論に對する批判的論議が喧々囂々として繼續する事十二箇年の後、彼の第二の力作たる『人間の系統』(The Descent of Man) が出版せられた。併しながら、彼が提唱した生物自然淘汰理法が、人類進歩 (human progress) なる事實と、如何に重大なる理論的交渉を有するか云ふ點は、彼が發表した第二力作を俟たずして、科學世界が等しく深甚の注意を拂ひ、慎重なる考察を重ねつゝ、あつた處である。「種の起源」出版前、即ち Darwin の名が未だ英國科學者の耳朶にさへも響かなかつた時分から、宇宙進化の理論的構成に腐心しつゝあつた、Spencer の如きは、Darwin の第一力作が、彼の机上にもたらさるゝや否や、直ちに「自然淘汰」の新説が、人類進化理論との間に、密接の關係ある事を認識した。而かして、慘虐性が跳躍せる生物

界の修羅場のみを見詰めつゝあつた Darwin も、又、宇宙現象の分化及び綜合を進化の事實なりとして、機械的進化論を構成しつゝあつた Spencer も、人類世界に特別に存在する一大 mystery の解決には、等しく腦漿を絞つた。其の mystery は外でもない。「何故に、慘酷なる Struggle for existence が最後の審判廷に於て、正義 (righteousness) に降伏

するか』と云ふ生物若くは宇宙進化論者に對つては、一つの paradox である。此の疑問を解決する鍵を與へたのは Darwin でも、又、Spencer でもなかつた。其の人は、其の當時、The London Economist (倫敦經濟誌) の一記者に過ぎなかつた。Walter Bagehot であつた。彼が社會學の文獻として、學界に寄與した著作は「Physics and Politics」(物理學と政治學) の一部に過ぎなかつた。此の著作は千八百六十七年十一月號から The Fortnightly Review (隔週評論) に連載せられた彼の諸論文を集めたもので、六章、二百二十三頁、量の點より觀れば、尠たる一小冊子に過ぎない。併し乍ら Darwin が此の書に始めて接したる時は、彼の荻生徂徠が近松の「會根崎心中」を讀み卓を叩いて天下の名文章と云つた如く、實に驚歎 (remarkable) すべき名論文なりと激賞したと傳へられて居る。Giddings も左の如き文字を以て、此の「倫敦隔週評論」の一記者の小著作に最高の讚辭を捧げて居る。

“No more original, brilliant or, as far as it goes, satisfactory examination of their deeper problems of social causation has ever been offered from that day until now.” (Studies in the Theory of Human society, p. 5)

生物が、宿命的に、體驗す可く豫定せられて居るむごたらしき生存争闘から、平和に對する眞摯なる願望、正義に對する強烈なる憧憬の如き情緒が、生物の一種に過ぎざる人類社會中に如何にして生成するか。此の疑問に對して、近世社會學中興の偉大なる學徒と稱せられる Spencer が、與へる事が出來た解答は、其根據證據共に薄弱で、其の結論は殆ど

獨斷に近く、彼の社會學的名聲を増さしむるものではなかつた。彼は斯様に考へた。『原始蒙昧の社會に於ては、原始的野蠻人は、彼等の生存を維持する爲めに、其の慾望充足の對象を、彼等よりも劣弱なる生物中に選擇する。斯くて彼等は食物として、衣類として、又は住居として、彼等が支配し得可き劣弱なる動物物を、其の犠牲に供する。故に、彼等の生存維持目的の追求は、他の生物の殺戮を其必然的手段とせなければならぬ。此處に於て、原始人の性質が、殺伐にして慘虐性に富む事は當然である。要するに彼等は、生物學的生存争闘場裡の優越者たらんとして、努力する生物の典型である。併しながら、時代が進化した、野蠻人中の或者が或は物理的力量に依り、或は精神的能力に依り、或は之等が合一した原因等に依り、一度彼等の優越的支配關係を劣弱者の上に確定し、權力階級制度、又は、私有財産制度などを創設し始めると、生存相互關係が、順次に、合目的秩序的となり、平和的色彩を帯びて来る。この「選ばれたる」彼等は、最早争闘殺戮を事とする生物的慘虐性の發揮を、必要としない。彼等の子孫は、傳統的に優越階級として、世界を支配し、典雅なる平和的儀禮の創成及發達に、彼等の精力の大部分を消費するに到る。茲に於て、彼等は、争闘苦を避け、平和樂を追求する性癖を助成する結果、協同 (cooperation) の必要を感じる。協同の必要から正義觀念が生れる』併しながら、其の時迄は未だ、Spencer は、上記の過程を、集團構成 (group formation) の關係、若くは、此の過程を、組成せられた、協働團體 (cooperating group) の集合的活動と

の關係に就いては、精細なる觀察を下して居なかつた。實際上 Spencer は、この時迄は、異種族生物間に於ける食糧獲得争闘にのみ注意し、同種族生物間の内部的争闘關係又は、内部的共同關係には、餘り注意を拂つて居らなかつた。故に、彼は、同一程度の文化教養を所有する人類間に於ける争闘の原因を、人類が原始時代に培養し、潜在的に残存せしめた野蠻的本能に在るを想像したのである。之に反して、Bachelof が擇んで考察した問題は、社會學理論の中核に直接關係あるものであつた。彼は、單純なる個體的生存争闘現象を、群團的生存及び群團的生存争闘現象より嚴重に區別し、後者こそ、社會學者が取扱ふ可き重要問題なりとして、特別に緻密なる研究を繼續した。彼は、社會構成の要素及過程を、彼の力作である "Physics and Politics" の第六章に、左の言葉を以て、明快に説明して居る。

『人類の進歩は、其に對する多數人の協同を必要とする。此命題の第一原理は、人類は「協同的團體」に於てのみ、進歩をなし得ると云ふ事である。この協同的團體と云ふ語を、部族 (tribe) とか、又は國家 (nation) とか云ふ語に代へてもよろしい。併しながら、部族や又は國家が、協同的團體であること云ふ事、及びそれ等のものが存在價值を有するのは協同的團體であるが故に云ふ點を直ちに看取し得る人が極めて僅かであるが故に、普通に廣く使はれない協同的團體なる言葉をを用ひたのである。若しも、或る社會が堅固なる團結を形成し得なかつたならば、其社會は、斯の如き協同團結をもつて居る或他の社會に依つて征服せられ、又は、死滅せしめらるゝであらう。第二の原理は、斯る團體の諸成

員は、相互協力を容易且つ敏捷に遂行するに充分である程度に類似してゐなければならぬ。斯の如き場合に於ける協同は、心神の共感的合一 (felt union) に基く。而して此合一は、團體成員間に於ける心理的感情の「類似」が、高度に存在する事を見出し得る時に於てのみ共感せられるのである。』

然らば、社會構成要素として缺く可らざる心意及感情に於ける「類似」は、如何にして生成せられるか。此の疑問に對して Bachelof は、直截簡明に、習慣則の權威 (the authority of customary law) を挙げ、それは人類間に存在する最も恐怖す可き壓制 (the most terrible constraint) の一つであると言つた。然らば、其習慣則は、如何にして發生し、如何にして強大なる勢力を把握するに至りしかと云ふ疑問に對しては、彼は、社會構成要素の一元論的解釋中、最有力なりと認識せられて居る模倣機能説 (theory of the function of imitation) を以て其の解答とした。此の點に關して、彼は前掲著書の最後の章に、一個の面白い例證を引用して、如何に模倣的法則が強力にして、習慣の壓制性が強大であるかを、説明して居る。彼が引用した例證を此處で紹介する。

『元來、規則と云ふものは、通常、最も子供らしい起源に依つて、出來たものである。普通にありふれた迷信とか、又は偶々或る地方に起つた些細の事件とか、が、動機となつて、其が慣習となり、其の慣習を遵守する人々が増加し遵守する時日が永續すれば、漸次其習慣が權威化して来る。而して、此習慣が、一般人に、壓制的制約力を有する規則と化して来る。ゴジ島に住んで居つた Captain 氏の土人に關する觀察は、此點に關し興味がある。之等の土人は、性質上、極めて保守的である。或日、この島の土人の會

長が、多くの従者を具して、山路を登攀して居つた。處が、先頭に立つた會長が、石か何かに躓いて倒れさうになつて、漸く踏み止まつた。是を見た従者のうち、會長よりも猶豪い、一般から思はれて居る一人を除く外、全部が會長と同じ眞似をした。此の種の模倣に依つて、規律せらるゝ生活程、氣の毒なものはない。』

Bachelof が模倣及習慣法なる二天普遍概念を抽出し來つて、社會現象を説明し盡さんとした點に於て、彼は、社會學上の模倣説を最も忠實に祖述したる社會學者として、廣く認識せられつゝある Gabriel Tarde の先驅者と稱する事が出来る。習慣 (custom) は、社會單位間に、或程度の類似を、創造する傾向を有する。即ち、習慣は、社會の固定化傾向を助長すると共に同時に、最も進歩的傾向を阻害する生活態様の凝結化を意味する。是の習慣の凝結力、即ち類似型相作傾向に反對して、變化 (variation) に對する或程度の可能性、又は傾向を與へる職能は、争闘 (conflict) の司る處である。Bachelof は觀た。

Bachelof の社會進合法則を、要約すれば、次の二點に歸納せしめる事が出来る。其の第一點は、統一 (uniformity) 及び一致共同 (Solidarity) に對する傾向、其第二點は、變化 (variation) と個性 (individuality) 及び對する傾向で、この二つの相反する傾向の争闘が、即ち Bachelof が提唱する社會進化である。或群團に於ては、この二個の傾向の一つが優勢で、他の群團に於ては、此の二個の傾向が相平均する場合がある。統一を標榜する政策の群團に於ては、秩序好く行はるゝも、進歩の活力に乏しい。個性尊重を餘りに強く主張する群團に於ては、進取の氣象鬱然たるものもあるも、團結力に乏

しい恨みがある。生存争闘場裡に、群團と群團と争ふ場合には、上記の二傾向が、最大なる群的能率を發揮するに最も都合よく調節せられて居る群體が、最後の勝利者となる事が出来る。

此の結論、即ち「倫敦經濟評論」の一記者であつた Bagehot が、約半世紀前、一小冊子に發表したる此の社會學的進化論が一面に於ては、今日科學的社會學理論的研究の中心問題と目せられて居る社會自己統制問題に對して、明快なる解答を與へ、他面に於ては、後の社會學上の模倣學派と一大暗示を與へたる事を思ふ時に、何人も Bagehot の originality の偉大さに驚嘆せざるものはあるまい。

四

The Origin of Species (1842) Darwin は一躍世界科學界の寵兒となり、彼が提唱したる生物進化論は、隨所に盲目的追隨者を輩出せしめたけれども、Darwin 晩年の偽はらざる心理傾向を推測すれば、彼が單に、慘酷なる自然淘汰論の提唱者としてのみ一般から理解せらるゝことは、彼にまつては、多少不本意な感があつたであらうと思はれる。彼の處女作たる「種の起源」が、それより十二年後に出版せられたる彼の第二作 "The Descent of Man" の間に、彼の生物進化論が、彼自身の反省熟慮又は彼の説に加へられたる學界の批判に依つて、少からぬ改訂を蒙つたこと云ふ事は、何人も注目す可き點である。特に、彼が「驚嘆す可き名著なり」を嘆賞した Bagehot の "Physics and Politics" 中に展開せられた獨創的な社會進化理論の如きは、少からぬ影響を彼の學說改訂上に與へて居る。Darwin

の第二作中、社會慣習及道德機能の起源を論じた部分なきは、全然別個の Darwin が、社會學者の衣を纏うて、論陣を進めて居るかの趣きがある。彼は其の第二作の中に、次の四要素を以て、生存争闘が規定する條件中から、如何にして、社會性及道德性が次第に發生し、進化し、遂に世界全體に浸潤するかの云ふ mystery を解かんことを企て、居る。第一に、部族相互間に於ける争闘場裡の勝利者たるには、群及部族結合力 (group or tribal cohesion) を増進せしむる事が最も重要な要素である。第二に、群及部族を結合せしめるには、同情 (sympathy) が最も大切な要素である。第三に、相互的忠信 (mutual fidelity) が私心無き勇氣 (unselfish courage) が重要な要素である。第四に、第三に掲げたる要素を、發達せしめる爲めに必要な、毀譽褒貶に對する感受性 (sensitivity to praise and blame) が重要な要素である。想ふに Darwin は、彼の進化理論最後の歸着點を、同情及利他心に置くこと云ふのが其の偽らざる真意であつたであらう。彼の第一作にのみ過大なる重要を附し、第二作に潜在したる著者の真意を、掬取し得やうし Neo-Darwinian Schools の末輩連は、Darwin の爲には、主に忠ならざる徒であらう。

五

Darwin に依り提唱せられ、Bagehot に依り尠からず改訂せられたる生存争闘場裡の適者残存主要條件、例へば群的同情感、又は協同的結束等に關し、更に精細なる研究を積み、社會學史上没す可からざる文獻的寄與を成したのは、通常無政府主義哲學の主唱者とし

て解せられて居る Prince Peter Alekseevich Kropotkin (1842-1921) である。彼の社會學的功績は、或點より觀察すれば、Darwin のそれと拮抗するに足る程、著大である。彼が千八百九十年 "The Nineteenth Century" (十九世紀) 誌上に發表連載したる論文 "Mutual Aid Among Animals" (動物間に於ける相互扶助) は、後に彼れが研究を續けたる未開人、及半開人の間に於ける相互扶助論と合せて "Mutual Aid" なる題下に出版せられ、自然

及社會科學者の注目を惹いた。「相互扶助論」に展開せられたる Kropotkin の意見は、其の理論的體系の方面に於ては、格別、新奇と目せらる可きものはない。然し、彼の學的業績を、不朽ならしむる所以は、彼が同情と協力との二大要素が、生存争闘場裡に如何に大なる働きをなすつゝ、あるか云ふ事、生理的力量、慘酷性、狡猾性の如きものを以て適者残存の主要資格なりとする生物自然淘汰の解釋論が、如何に不完全であるか云ふ事の二點を論證するに充分である豊富なる材料を學界に提供した點にある。

自然淘汰の暴君が、或は許容して生存發達を助長せしめ、或は排斥して之を衰退死滅に誘致する生物の個性 (individuality) 又は、變異 (variation) に關しては、Darwin 自身が、彼の説明の不備不完全なる事を承認して居る。彼は時には、それを自明の理として説明を省略し、或は、それを偶發的現象として簡単に説明し去つた。要するに彼は、集團的習慣、同情、毀譽褒貶に對する感受性の起源に關しては、總ての點を、詳細に説明して呉れなかつたけれども、之等の要素は、現に生物

現象中に明確に存在し、且つ認識し得可きものなる事を、證明して呉れた。特に注意す可き點は、Darwin 及 Kropotkin の學的努力が、共に、前に記載したるが如き社會進化の諸要素を、多量に包蔵する群團は、生存争闘に際して、優越せる地位を占め、殘存の機會を、より多く所有すること云ふ事實を證明して呉れた點である。

六

Bagehot に依つて明確に認識せられ Darwin の晩年に至つて彼の生物進化論中に取り入れられ、Kropotkin が蒐集したる豊富なる資料に依つて、其の適確性を證明せられた社會進化の諸要素、特に同情、協同、相互扶助等の起源に付き、全然新なる立脚點より、理論を展開した社會學徒の内に John Fiske (1842-1901) がある。彼は米國學者中で、最もよく Spencer の哲學を理解し、且つ忠實に、是を祖述したる宗教的及人道的色彩の濃厚な一哲學者であつた。彼は Spencer の宇宙進化理論を、大體に於て、受容したが、其の特に力説したるは、社會進歩の tests を、利己心の繼續的減弱 (the continuous weakening of selfishness) 及び同情心の繼續的強化 (the continuous strengthening of sympathy) として求めんが點であつた。其の同情心強化の有力なる原因として、彼は幼年期延長効果論 (the theory of the effects of prolonged infancy) を提唱した。彼は此の論を、千八百七十三年十月號の The North American Review (北米評論) 誌上に「動物より人類への進歩」の題下に、發表し、一年後に、それを彼の大作たる "The Outlines of Cosmic philosophy" に纏めた。Fiske は

校報

山岡氏總理事就任

曩に本大學擴張後援會を創始し同會々長として本大學擴張事業に盡瘁せられたる山岡順太郎氏は、別項記載の如く今回本大學に入られ愈々總理事に就任せられ専ら學務を總理せらるゝこととなつた。

垂水氏專務理事辭任

永年本大學專務理事として只管學務に執筆せられたる理事垂水善太郎氏は這回專務たることを辭せられ關西甲種商業學校主事として専ら同校々務に携はらるゝこととなつた。茲に同氏多年の勞を謝するに同時に今後尚ほ本大學並に附屬甲種商業學校の爲めに盡力せられんことを希望して已まぬものである。

本大學組織一部變革

去る五月二十日開催の本大學理事會の結果内部の組織に多少の變革を來し左の諸氏が夫れ々理事、監事、評議員たらし、ここに決定せり。

總理事	山岡順太郎氏
專務理事	柿崎欽吾氏
同	宮島綱男氏
理事	垂水善太郎氏
同	白川朋吉氏
同	法學博士 佐竹三吾氏
同	池尾芳藏氏
監事	武内作平氏

同	大鐘彦 市氏
同	山口房五 郎氏
顧問	法學博士 織田 萬氏
同	法學博士 桑田 熊藏氏
關西甲種商業學校主事	垂水善太郎氏

評議員

一瀬勇三郎氏	男爵藤田平太郎氏
河村善益氏	手塚太郎氏
谷田三郎氏	堀啓次郎氏
村山龍平氏	加太邦憲氏
常松英吉氏	執行軌正氏
古莊一雄氏	關一氏
男爵池善右衛門氏	水島鐵也氏
寺島小五郎氏	本山彦一氏
木村清氏	加福力太郎氏
水上長次郎氏	内田信也氏
佐多愛彦氏	高木利太氏
井上虎治氏	喜多又藏氏
下村耕次郎氏	安宅彌吉氏

本大學昇格案可決さる

全校三千の學生は言ふまでもなく、校友其他關係者が鶴首して待つて居た本大學昇格案は、愈々去る五月二十三日の教育評議員會に上程され、滿場何等の異論もなく可決せられた。應て正式に認可せらるゝこと近きにあるべきも、茲には唯だ之だけを報ずるに止め、

群性傾向 (gregariousness) の社會性 (sociality) を嚴重に區別した。併しながら、彼は此の兩者の性質の徹底的分析もしなければ又之に對して明確なる定義をも與へなかつた。只、彼は、社會性を目して、同種同族に對する同情、愛着、及忠信の心が、比較的高度に發達したものである云ふ事を意味した如く見ゆる。又、其の社會性は、其の起源を、永續的小家庭團體に見出すと説いて居る。此の家庭團體とは、必ずしも一夫一婦制度の其れのみを指稱しない。一妻多夫、多妻多夫、或場合には氏族にまで擴大しても差支ない。併しながら、此の家族團體は、單純に、群在する獸群の間に見出される一時的配偶關係よりも永續的な事を必要とする事は無論である。人類が、家族關係を創設し、其の基礎を強固にし、其の永續を企圖し、又、家族成員間に愛着の感情を、結合統一の意志を發生せしむるのには、人類の幼時期間、即ち両親が兒童を鞠養する期間の長期に亘る事が預つて力ある

親を恒久的に結合せしむる點に就いて、重大なる社會學的意義がある。此の爲めに、社會性の基礎である同情心が、發生し發達する。斯くて、人類は動物から區別せられ、社會性 (sociality) は單純なる群性傾向 (gregariousness) より區別せられ、道義の感心は快樂主義より區別せられ、正邪の觀念は快苦の觀念より區別せらるゝ彼は説いた。

『動物が人類の如く、高等生活様式を經驗するに到れば、益々複雑性を加ゆる環境に對して、之に應化する有機的組織も、從つて複雑にならなければならぬ。下等なる生活態様に於ては、應化作用は、自動的、若くは本能的であり、又之で差支ない。然るに、之に反して、高等生活態様に於ては、應化作用も亦複雑多端を極めるので、其れには豊富なる經驗を必要とする。この複雑なる經驗を修得するには、幼時期間の延長を計り、教育の完全を期せなければならぬ。然らずんば、生存争闘場裡の、榮冠者となる事は出來ない。』

此の幼時期間の延長は、嬰兒保護に對して必要なる永續的家族生活を創成し、且つ其の兩

『The collective struggle for existence was a factor in the evolution of man before man became a factor in the evolution of society. Giddings, Studies in the Theory of Human Society, p.9』

原因である云ふ事も主張する事が出来る。Fiske が主張した如く、複雑なる習慣を形成し、同じく複雑なる環境に對する應化作用を運営し、生存争闘場裡の優勝者たる地位を獲得するには、高度に發達したる腦力、及び之れに相當する幼時期間の延長を必要とする云ふ點は、眞理である。併しながら、茲に最も注意すべき重要點は、生存に對する集合的争闘は、人類が社會進化の一要素となる前に、人類の進化の要素となつた云ふ事である。

詳細は次號(昇格記念號)に譲るゝする。

第三十四回卒業式舉行

本學第三十四回卒業式は、附屬關西甲種商業學校卒業式を兼ねて、本年三月二十日午後一時より、本學第一講堂に於て舉行せられた。來賓としては、校友、大學關係者の外に、朝野貴紳の參列せらるゝもの甚だ多く、先づ、歐洲滞在中にて不在なる學長の代理として柿崎理事の告辭に始まり、各理事、評議員、文部大臣、知事、市長、大阪控訴院長、本學擴張後援會長、一般來賓並に學生生徒總代の祝詞の朗讀あり、次いで、之に對する卒業生總代の答詞あり、午後二時盛大裡に式は閉ぢられた。

市長祝詞

本日茲に關西大學第三十四回並に關西甲種商業學校第七回の卒業證書授與式を擧げらるる惟ふに本校創立以來校運年々共に盛にして其の間幾多の人材を教養し文運の進歩に貢獻せられたる所甚だ大なり今又此の盛典を擧げて更に有爲の青衿を輩出せられたるは單り當校の聲譽の爲めに慶祝に堪へざるのみならず邦家の爲めに洵に欣賀措く能ざる所なり夫れ文化の進展は其歸する所之を教育の振興に待ちて青年の徳業を向上せしむるにあり軌近世局の大潮愈々文明の根底を涵養するの最も緊切なるを念ふに至りて此の道更に大に宣揚せざるべからざるを覺ゆ此の時に當りて卒業生諸氏は多年研鑽の功を積まれ智徳共に進み將に社會の實務に就かれんことを諸氏の前途や多幸にして且つ多望なりと謂ふべし冀くは諸氏益々其の志す所を操りて徳に依り智に處して以て將來の大成を期せられ本校教育の本旨を完く

せられんことを一言を叙して祝辭を爲す

大正十一年三月二十日

大阪市長 池上 四郎

評議員總代祝詞

國運發展の基礎は教育の振興にあり本學創立以來既に三十有五年其間幾多の英才を教養し社會の文運に貢獻せらるゝ所誠に尠からず今や關西に於ける有力の私立大學として重きを爲すに至りたるは學界の誇りとする所なり本日茲に第三十四回及附屬關西甲種商業學校第七回卒業證書授與の盛典を擧行せらるる洵に慶賀に堪へず望むらくば諸子時局の重大なるを念ひ研鑽自修益々學理の應用に實務の練習に力を致し國運の進展に盡されんことを一言を叙し祝詞を爲す

大正十一年三月二十日

評議員總代

法學博士 谷田 三郎

後援會長祝詞

私は昨年本大學が第三十三回卒業證書授與式を擧行せらるゝに當り評議員の一人として卒業生諸君に一言を呈するの光榮を有したり而して過去一箇年を通じ私の本大學に對する關係益々深厚を加へ本日は評議員の一人たるのみならず更に本大學擴張後援會長の名に於て卒業生諸君を送り且つ其前途を祝するの機會を得たるは一層欣快とするところなり本大學は建學以來既に三千有餘の卒業生を算し今又有爲の英才五百餘名を出す實に源開いて萬泉湧くの感あり盛なりといふべし親愛なる五百有餘の卒業生諸君は諸君一代の歴史に於て最も記念すべき本日の榮譽ある式典を以て一新紀元を劃し濟々として關西大學

の學苑を出て將に社會に立ちて其學べることを其行ふところに施して各々其機能を發揮せんことを洵に慶祝に堪へざるなり而して私は思ふ演劇に背景ある如く諸君の社會的活動にも亦必ずや背景を要すべく其背景一ならずとも其主たるものは諸君の母校即ち是れなり

大正十一年三月二十日

關西大學擴張後援會

會長 山岡 順太郎

因みに、本年度の大學各料卒業生數及び、成績優等若くは佳良の爲めに、賞與せられた者の氏名は左記の通りである。

- 大學部法律學科 一名
- 同 商業學科 六名
- 同 經濟學科 一名
- 同 專門部法律學科 十一名
- 同 商業學科 一〇六名
- 同 經濟學科 三一名
- 成績優等にて、賞牌を授與せられ、且つ山本獎學資金により賞與せられたる者
- 大學部商業學科 古川 武
- 專門部商業學科 塚本利三郎
- 成績佳良に付賞牌を授與せられ、且つ山本獎學資金により賞與せられたる者

- 大學部法律學科 小寺 正久
- 專門部法律學科 西本 寬一
- 同 經濟學科 山本 四三
- 成績佳良に付、山本獎學資金により賞與せられたる者
- 專門部法律學科 瀨良 智一
- 同 商業學科 井上 兼三
- 同 經濟學科 辰巳 寅造
- 同 經濟學科 辰巳 常世
- 成績佳良に付、賞牌を授與せられたる者
- 大學部經濟學科 吉川 太三郎

進級試験成績優等並佳良者

本年三月施行進級試験の結果成績優等若くは佳良であつたことにより左記の諸君は各賞牌一個を授與せられた。

- 優等者 稻井 義夫(法二)
- 佳良者 植村 正文(法三)
- 大島 生夫(商三)
- 笠井 毅(法二)
- 中川 晋一(商二)
- 富山 忠三(經二)
- 山崎 峰雄(大豫二)

本學年度各科新入學生數

- 本年四月開始新學年度に於ける各科入學生數左の如し。
- 高等研究科 三一名
- 大學豫科 二〇〇名
- 專門部法律學科 二〇八名
- 同 高等商業學科 二四九名
- 同 經濟學科 一四四名
- 同 法律豫科 一二九名
- 同 高等商業豫科 一五一名
- 同 經濟豫科 四五名
- 合計 一一五七名

高等研究科面目一新

本學高等研究科の組織は從來から出来てゐたが、殆ど名目のみの存在で、唯だ二三篤學の士が、卒業後尙ほ學籍を置いて、高等試験の準備に努むるさいふに過ぎなかつた。所が、這回宮島、岩崎兩教授の熱心なる斡旋と盡力により、漸く面目を一新して、眞に高等研究科なる名に副ふだけの實を具備するに至り、左に記載する如く、多數の眞率なる學徒を收容して、未曾有の活氣を呈してゐる。

大正十年度入學者

山本 哲應 山田 一太郎
(以上十年度法科卒業)

竹内 專一 郎 松 永 三 郎
(以上十年度農科卒業)

大正十一年度入學者

吉見 嘉一
(七年度法科卒業)

伊藤 一 郎 大塚 重太郎
(七年度法科卒業)

中村 貞雄 梅原 貞次郎

山崎 藤吉
(以上本年度法科卒業)

秋山 卓爾
(十年度農科卒業)

大谷 鹿一 岡崎 祐廣

片山 一男 巽 鐵太郎

卜部 文人 山本 兼治

松本 茂 古川 武

天野 平一 赤井 貫二郎

貴志 房廣 三島 律夫

山本 彌一 郎
(以上本年度農科卒業)

糸島 實太郎 柿原 拓

柏木 富吉 吉川 太三郎

辰巳 經世 中谷 岩夫

上田 良治 山本 四三
 前田 清一 船越 盛人
(以上本年度農科卒業)
 井上 仁三郎
(本年度農科卒業)

新校舎一部竣成

府下三島郡千里村千里山山頂に於ける、本學新校舎建築工事は、昨年七月起工以來着々進捗し、既に同年中に地均工事を了へ、先月末更に校舎の一部(大學豫科教室全部)竣成せり。尙ほ引き続き大學本館並に附屬甲種商業學校校舎の建築を急ぎつゝ、あるが、同所は、大阪市を距る北方三里の地點に在り、遠く塵界を見下して、青松の間に隠現する學舎の英姿は、遙かに崇禪寺、淡路(北大阪電鐵沿線)附近よりすら、望むこゝを得べく、唯だ偉觀と言ふの外なし。

因みに今回竣工せる部分は、建坪五百三十坪、階上並に地下室を合して、延坪數一千百坪に達し、其の包容する所、二十五教室の外に教授室、講師室、來賓室、學生控所等遺憾なく完備し居れり。

尙ほ附近に、廣大なる地域をトして、大運動場の建設にかゝりつゝあるが、テニスコート、野球グラウンド等、既に完成せるものもあり、又目下工事中にて、その完成を急ぎつつあるものもあり。

千里山新校舎始業式

本學各科各學年の授業開始は、毎年四月であるが、本學年度は特に大學豫科全部及び同本科一年に限り、新築千里山校舎の竣工を待つて、始めるこゝになつてゐた。而して右新校舎は、別報の如く、去る四月末漸く一部の

竣成を見るに至つたので、愈々同校舎に於ける最初の授業を、五月一日から開始するこゝになり、同日午前十一時、新緑の色に圍まれた、千里の山頂に屹然として聳ゆる新館の講堂で始業式が舉行せられた。

大學各關係者並に教授講師を初め、多數の來賓の外に會する學生四百餘名、岩崎教授指揮の下に、靜寂の天地を搖がす校歌の合唱と共に開式、先づ垂水理事の新築工事其の他に關する簡單なる報告あり、次いで、山口監事の式辭、本學評議員水島鐵也氏の祝詞、宮島教授の大學本質論等が述べられ、關西大學萬歳の三唱と共に頗る盛會裡に式は閉ぢられた。

尙ほ、式後、岩崎教授の學生に對する、運

學友會報

學友會幹事選出

本學年度學友會幹事選舉の結果當選したる者左の如し。

- 祈 隆 一 (法三)
- 田中 良直 (同)
- 南 利 三 (同)
- 江村 至身 (同)
- 石田 新十郎 (商三)
- 大西 幾郎 (同)
- 栗田 豐國 (同)
- 森川 太郎 (同)
- 竹村 熊次郎 (經三)
- 梅田 茂 校 (同)
- 佐野 茂 (同)

動部に就ての希望の陳述あり、夫れが濟むこゝ、各學生は三々五々、或は嫩草の上に腰を下して、頌與された折詰に、舌鼓を打つ者もあり、或は老松の樹間を校歌を高唱しながら、逍遙する者もあり、微風にそよぐ木々の若芽も、晩春の陽を受けて白く輝く葉の傍りに燃ゆる陽炎も、若き兒の幸を壽ぎ、方に伸びつゝある本學の將來を祝福して居るかの感があつた。

新聞科新設に就て

本學擴張事業の一として、中等並に高等記者養成の目的の爲に、新たに新聞科を設置せんこの企てあり、これが具體的の事實となつて現はれて來る日も、遠い將來ではあるまいと思はれる。

- 田邊 由一 (法二)
- 棗 耕三 (同)
- 宗 内 正 (同)
- 岡村 順藏 (商二)
- 奥田 峰一 (同)
- 松本 徹 (同)
- 井上 孟 (經二)
- 望月 靖彦 (同)
- 徳 竹 要 (大豫二)
- 米田 浩三 (同)
- 山崎 峰雄 (同)
- 木村 鹿男 (同)
- 北山 延之進 (專豫)
- 松井 慶次郎 (同)
- 中西 多三郎 (同)

校友會報

本年度春季校友總會

本年度春季校友總會は第三十四回卒業式祝賀會を兼ねて三月二十日午後四時より中之島大阪ホテル大廣間に於て舉行せられたが會員の會するもの約五百名頗る盛會であつた。尙ほ當日選舉によつて本年度に於ける本會常議員及び常任幹事として左の諸氏が選出された。

常議員 (イロハ順)

- 小野村 胤 敏氏 和田 相也氏
- 吉田 音 松氏 高村 久之助氏
- 瀧 本 貢氏 内 藤 正 剛氏
- 深川 重 義氏 三雲 住三郎氏
- 宮 島 綱 男氏 清水 新造氏
- 常任幹事 (イロハ順)
- 吉田 音 松氏 内 藤 正 剛氏

本年度卒業新校友現住所氏名

- 西區藤原堀裏町一〇〇 伊藤 一郎
- 西成郡新庄村下新庄八四 生島 信治
- 神戸市須磨町東須磨橋ノ橋一 五十川 直市
- 神戸市山本通二丁目二七ノ三 池 知壽 一
- 堺市大町一六 石 合 操
- 一木 正 光
- 生 澤 楯 政
- 石 橋 甚 吾
- 池田 伊 太郎
- 東成郡鶴橋町東小橋五三ノ一 池口 幸太郎
- 東區東平野町四ノ一二七石田方 原 知 夫
- 西區築港七條通一ノ一 馬 場 治 郎
- 北區西野田茶園町七八七 橋岡 熊四郎

豊能郡箕面村大字平尾

- 西區江戶堀北通四ノ一四西川方
- 東成郡中本町中道九八西田方
- 西成郡北中島村高須神野方
- 兵庫縣川邊郡小田村岡村三郎方
- 東區今橋五丁目登下方

- 岡山縣久米郡井和村榎原
- 北區上福島中四、二一七左吉方
- 北區北野小深町一四西野方
- 西成郡鷺洲町南浦江五四一進藤方
- 北區上福島北三ノ一九〇佐野方
- 北區上福島北二ノ一〇九渡坂方
- 北區上福島北二ノ九七
- 南區戎町四ノ二五九
- 明石市大明石村二〇二
- 奈良高天市町九
- 北區佐藤町三北川橋橋方
- 東區釣鐘町二丁目二四
- 北區富田町四二
- 南區難波新川二ノ六八八三原方
- 南區天王寺勝山通一東立寺方
- 北區北野芝田町一六一ノ一
- 堺市大町西四丁一〇
- 西成郡海老江一四六二

- 原 仙 吉
- 花 本 春 吉
- 西 本 寛 一
- 西 尾 音 滿
- 星 野 俊 一
- 力 石 捨 一
- 林 昌 煥
- 小 川 通 央
- 岡 田 清 作
- 太 田 周 平
- 太 田 元
- 大 西 貞 之 助
- 大 塚 重 太 郎
- 大 白 愷 三
- 岡 野 衛 士
- 大 谷 美 孝
- 渡 邊 辰 巳
- 河 合 庄 右 衛 門
- 甲 藤 讓
- 蒲 生 庄 之 助
- 片 山 元 藏
- 笠 置 省 三
- 柏 太 郎
- 勝 原 利 彌 壽
- 川 合 正 太 郎
- 吉 田 周 平
- 吉 田 要 作
- 吉 見 幸 雄
- 横 山 侃 二
- 高 谷 太 次 郎
- 丹 二 良
- 高 尾 晋 太 郎

- 神戸市兵庫西尻池町五丁目三ノ二 竹 内 將 英
- 北區東野田町三丁目三五五 田 中 慶
- 西成郡海老江一四二五 高 田 政 信
- 市外天王寺村市電公舎西三十號 田 口 正 男
- 北區東野田町一丁目三二一龜山方 田 中 又 一
- 西區川口町一四ノ乙東洋捕鯊會社 高 橋 哲 四 郎
- 辻 二 一
- 辻 本 安 石
- 中 島 博 通
- 永 石 光 雄
- 永 野 勝 重
- 中 原 千 鶴
- 並 平 生 駒
- 中 田 吉 兵 衛
- 長 田 喜 代 馬
- 村 山 春 喜
- 上 妻 博
- 上 角 道 夫
- 梅 原 貞 次 郎
- 上 田 武 雄
- 上 野 權 七
- 岡 久 富 吉
- 栗 須 一
- 郡 司 仁
- 矢 野 末 安
- 山 口 伊 勢 吉
- 山 崎 藤 吉
- 山 本 壽 治
- 松 川 孟 一
- 増 原 義 高
- 眞 木 益 太 郎
- 深 澤 美 登
- 深 田 實
- 藤 井 彌 一 郎
- 福 田 福 一
- 古 川 龜 雄

- 西成郡千舟村仙南ノ町 藤 谷 政 之 助
- 神戸市兵庫水木通八丁目八正國寺方 藤 井 正 信
- 北區北野兎野町觀音寺方 藤 田 彌 太 郎
- 北區上福島北一丁目五七ノ一二 福 田 惠
- 神戸市西代字後二八ノ七ノ一三 藤 原 善 平
- 市外海老江二〇八管方 小 寺 正 久
- 神戸市旭通二丁目七二ノ七 合 田 賢
- 東區元伊勢町七八八 小 林 茂 樹
- 西區江戶堀北通三丁目九 荒 木 正 毅
- 北區北野小松原町三七九 天 野 貞 夫
- 同 天 野 美 耶
- 北區本庄浮田町八〇八 安 藤 周 藏
- 兵庫縣川邊郡稻野村御願塚西光寺方 安 藤 章 二
- 堺市南半町川向一〇七 赤 松 茂
- 北區大深町鐵道管舎四二ノ八 麻 田 友 三 郎
- 兵庫縣武庫郡西宮町東口武川方 安 藤 藤 綱
- 兵庫縣武庫郡西灘村川原二四六ノ二 澤 山 勘 兵 衛
- 神戸市兵庫上澤通三丁目六四 澤 田 正 雄
- 東成郡鷺洲町大仁一〇三 木 澤 才 藏
- 豊能郡庄内村菰江青年會社内 菊 川 豐
- 兵庫縣明石郡舞子 宮 野 宗 一
- 北區上福島北二ノ一二六 宮 浦 要
- 西區櫻島町三島町三郎方 島 袋 永 幸
- 北區上福島中二丁目清原橋方 新 原 新 太 郎
- 神戸市神若通一丁目一ノ一七 白 川 千 代 治
- 東區中道川西町四四八 柴 田 登 喜 次
- 東成郡小路村字片江一九七井井方 日 高 宇 平
- 南區湊町驛前南入宮崎定次郎方 平 松 紋 次 郎
- 東區上本町八丁目大塚方 平 田 奈 良 太 郎
- 西區難波三丁目四區三九號 平 野 七 郎
- 兵庫縣明石郡垂水水名谷 東 左 近
- 北區上福島北一丁目一四九進藤方 平 井 磯 二 郎
- 森 皓

南區天王寺東上町五五六一ノ五 瀨波 暹男
 東區寺山町四九〇田中 瀨 良智一
 菅田 清明
 砂邊 松範
 杉本 幸次郎

(以上法科卒業)

北區北野我野町八〇八 岩 田 弘
 北區上福島北二丁目一〇二木村方 井上 兼三
 市外十三小島五一 磯 西文藏
 北區天神橋筋二丁目二二 板 倉 匡
 神戶市平野下祇園町六四今泉方 岩岸林三郎
 北區會根崎中二丁目九五 石 塚 清
 西區西道頓堀通三丁目牧野方 長谷川 房造
 西區土佐堀裏町一七讀賣新聞支局 芳 賀 定 德
 東區東平野町七丁目二六九 長谷川 九一
 北區新川崎町三三三 早川 彌五郎
 北區上福島北三丁目一九〇小松館 西 長市郎
 豐能郡豐中村十五銀行社 富 山 久 安
 東區和泉町二ノ一平林甚輔方 東 條 武 夫
 西區北堀江上通一丁目一八 岡 崎 一 雄
 北區上福島北三丁目五八八瀨マキ方 奥 瀬 正 一
 西區四貫島町二〇二 大 谷 鹿 一
 兵庫縣西宮町西濱新家三三五杉山方 奥 田 圭 珪
 北區本庄黒崎町七〇六菅沼方 大 西 勇 也
 北區上福島北二丁目一〇八九美方 大 塚 右 左 男
 市外生野村字舍利寺四五 大 塚 祐 廣
 西區九條南通四丁目梅翁寺方 岡 崎 祐 廣
 東區和泉町二丁目二七菊地方 ○ 村 治
 北區櫻宮仲之町九六 小 川 重 治
 北區上福島北三丁目二〇ノ一時崎文雄方 小 川 成 雄
 兵庫縣川邊郡小濱村米谷四 和 田 正 節
 北區會根崎上二丁目七八市村和助方 若 林 要 四 郎
 尼崎市大物村大字大隅 金 子 照 邑
 北區西野田江成町二九一永島方 金 尾 建 雄
 三島郡大冠村大字下田部 川 畑 角 三
 北區中之島玉江町二丁目七 片 山 一 男

北區西野田玉川町一丁目五七 桂 實
 北區上福島三丁目三二八宮内貞代方 間 舍 喜 三 郎
 吉 田 正 幸
 西區木津川運河市電終點東入 谷 口 義 廣
 府下三島郡高槻大字土田部 高 井 修 造
 西區新町通一丁目一八 辰 巳 寅 造
 西區九條南通三丁目五ノ一高松惣一方高須賀 博
 市外鶴橋町天王寺五八二八 谷 喜 代 雄
 西區築港八條通一丁目五 瀧 口 末 雄
 北區上福島北三丁目五ノ一時崎文雄方 巽 鐵 太 郎
 北區中野町北中野四三 高 谷 健 造
 市外玉出町五四三 祖 母 井 之 正
 北區堂島中一丁目五〇 塚 本 利 三 郎
 東成郡榎並町内代一九木村勸助方 中 上 正 雄
 南區日本橋筋四丁目二五 中 村 峰 藏
 西成郡神津村字木川三三一 長 坂 哲 二 郎
 東區今橋三丁目大坂農工銀行内 仲 村 幸 七
 西區江戶堀下通五丁目六一 中 西 幸 男
 東成郡鶴橋町字岡一八 中 村 文 雄
 廣島縣佐伯郡古田村田方 長 谷 丈 太
 東區南久太郎町三丁目八田仲實店 長 久 保 昇
 兵庫縣川邊郡小田村杭瀬八 中 西 秋 男
 東成郡鯉江町字蒲生一森猛夫方 中 村 真 之 助
 北區信保町一丁目一橋詰方 上 田 俊 夫
 中河内郡布施村東足代杉田方 梅 原 謙 次
 北區北野小松原町三六九岩田方 宇 部 宮 蒨
 東區森ノ宮西ノ町五九九松本方 碓 井 榮
 西成郡神島村字東ノ町一六六水谷方 卜 部 文 人
 野 口 外 世 松
 西成郡北中島村字三國山本遊藝方 山 本 兼 治
 西成郡中津町下三番三一 山 本 彌 一 郎
 佐世保市山縣町三二 山 口 熊 雄
 西成郡千舟村字佃下ノ町二六一 八 木 弦 三
 中河内郡意岐郡村新家三九〇 矢 野 國 夫
 西成郡鷺洲町南浦江三九〇石川保吉方 山 岡 次 郎
 南區天王寺筆ヶ崎町五五四四ノ六 山 口 蓼 夫

京都市室町通三條下ル松本南二方 松 本 健 吉
 東區上本町八丁目一八五 馬 渡 真 夫
 堺市甲斐町二丁一五本田ヨネ方 松 本 茂
 西成郡今宮町字今池松本善作方 松 本 樹 治 郎
 西成郡千船村大字佃 正 富 代 次
 市外大仁二二六戸田方 福 部 知 一
 西成郡神津村新在家田村利吉方 古 川 武
 市外天王寺村茶屋前二〇八四ノ四 福 井 耕 助
 市外鷺洲町海老江帝國保溫會社 藤 川 義 廣
 西成郡鷺洲町海老江一五〇八 藤 原 誠 太 郎
 藤 原 誠 太 郎

校友逝去

本學校友左記三氏、最近逝去せられ
 たる計に接し哀悼に堪はず、此段校友
 諸氏に告ぐるゝ同時に、茲に謹んで弔
 意を表す。

東京市深川區西大工町一〇
 辯護士 竹 本 順 一 氏
 (四十四年度法科卒業)

松江市母衣町一一九
 笹 井 金 作 氏
 (三十五年年度法科卒業)

愛媛縣新居郡中萩村
 飯 尾 節 次 氏
 (大正十年年度法科卒業)

北區上福島北三丁目五ノ一太城康政方 榑 原 貞 則
 北區上福島北二丁目一九杉本方 崎 原 好 仁
 和歌山縣海草郡貴志村字梅原 貴 志 房 廣
 三島郡吹田町 木 下 直 文
 北區西野田江成町三〇二 三 輪 又 右 衛 門
 市外鷺洲町大仁一〇五ノ四伊藤耕作方 三 好 千 太
 北區西野田龜甲北之町一四八 南 仙 玉
 北區本庄西權現町一三二六 三 島 律 夫
 北區天王寺小宮町五三六八谷森方 宮 井 茂 雄
 神戶市東川崎町四丁目一五七 秦 泉 寺 義 雄
 北區北野佐藤町二二宮崎方 清 水 公 平
 泉北郡高石町今在家五五〇 東 守 寛
 西區阿波座中通二丁目二七七 日 吉 一 夫
 名古屋市西區袋町六丁目六 平 出 脩 吉
 東成郡古市村字字林 東 原 種 次 郎
 南區末吉橋通二丁目鈴木商店方 榑 谷 茂 信
 北區上福島北二丁目一七七藤田方 森 數 一
 福知山歩兵第二十聯隊第五中隊 森 下 啓 治
 西區南堀江上通四丁目開口清吉方 關 口 平 太 郎
 神戶市割塚通二丁目三八四 住 田 吉 次
 西區南堀江上通二丁目一ノ一 末 廣 滿 吉
 市外鯉江町新喜多三一九 杉 山 茂
 北區上福島北一丁目一四二橋本方 住 野 野 隆
 兵庫縣川邊郡小田村潮江 住 田 吉 次
 (以上商科卒業)

北區西野田吉野東ノ町四二三 岩 堀 敏 郎
 石 原 芳 太 郎
 石 黒 純
 糸 島 實 太 郎
 東成郡城東村鴨野橋七〇二 西 富 義 雄
 北區東野田町六丁目一四八 尾 形 貞 次
 南區榮町二丁目岩崎商店 片 岡 安 吉
 豐能郡箕面村櫻井里方 柿 原 拓
 兵庫縣武庫郡御影町字掛田 柏 木 富 吉
 市外豐崎町北長柄一七七 吉 川 太 三 郎
 北區上福島北二丁目一九杉本方 吉 里 虔 治

西成郡玉出町二四五 横井吉造
豊能郡南豊島村字勝部 辰巳經世
北區玉江町福島新館内 永井嘉吉
中村春三
中西静麿

神戸市割塚通三丁目三ノ九中村梅子方 中谷岩夫
東成郡住吉村天神町一五二 上田真治
栗原浩徳

北區上福島北二丁目開甲南内 山本四三
北區中之島二丁目二 藤井新次郎方 山本武次太郎
北區西野田龜甲南之町一二四岡本方 前田清一
藤井鶴雄

西區京町堀上通二丁目八五 船越盛人
江頭松太郎
南區末吉橋通二丁目一三長岡商店方 寺本實
木村七五三太郎

北區北野大深町鐵道官舎内田公方 三輪一耶
箕浦秀之助
芝田宇一

西區九條南通四丁目三〇平島醫院内 平島魯一
東區船越町二一九 關口安綱
(以上經濟科卒業)

高等試験登第者
本大學卒業生及び嘗て本大學に在學せしことある者にして本年三月施行高等試験に及第せられたる諸氏左の如し。

△印は嘗て本大學に在學せし者
判檢事試験及第者
岡山 西山儀助
奈良 仲井彌
静岡 根上信
長野 山崎伊勢門
總計四名

辯護士試験及第者
廣島 澤井保

廣島 増原又一
和歌山 山野巖
△高知 川村角治
奈良 和田和一耶
兵庫 石橋利之
福井 荒川庄次郎
△大阪 中尾真一
岡山 石戸官治
岡山 岡本安治

△香川 東鐵雄
△香川 上原秀三耶
靜岡 根上信
岡山 永井惠美太
岡山 花田菊太郎
大坂 高梨乙松

鹿兒島 竹村熊四耶
廣島 花本菊次郎
高知 堀内勇志
岡山 美和友太郎
岡山 東田輝平
愛媛 元木道春
△兵庫 森澤梅次
和歌山 中尾武雄

廣島 木村三太郎
徳島 吉本龜藏
岡山 山崎常市
東山 片山義忠
大坂 田中藤作
△廣島 高尾英

滋賀 三國信一
熊本 別城造一
大坂 尾山尙介
△大坂 楠野泰夫
△大坂 竹ノ内勇
△大坂 堀川嘉夫

△大坂 長山直樹

△大坂 長山直樹

△大坂 長山直樹

△大坂 長山直樹

大坂 藤井政治
鹿兒島 新留嘉吉
愛知 成田幸一
總計四〇名

一校友より(四月八日附)

日と共に母校の發展し且つ社會的地位の向上せる事を喜んで居ります。愈々昇格も近き日にある様聞いて吾れく校友も欣喜の情禁じ難いものがあります。處で母校の爲めに御盡力して下さい諸氏に感謝致します。尚ほ此の際もう一つ御盡力を希望し度い事があります。其れは他でもありません。機關雜誌の事でありまして。今迄發行になつて居るのは學友のみの雜誌であつて今もう一つ昇格と共に雜誌も擴張して學友と校友と相互の雜誌にして戴き度い事があります。此れはお互に皆の望む處だらうと思ひます。他の専門學校では大方實行して居る様見受けます。

吾々校友は母校の現状や校友の消息を知る事がどんなに楽しみな事であるかを想像して下さい。此の事を行ふに就ては可成研究もいります又手数も要します。然し其れが吾々校友を始め學友全體の望む事だらうと思ひます。で只管諸氏の敏腕におすがりしたいものであります。幸ひ此のことが實現せられたなれば如何に多くの人々が喜ぶことぞございませう。最後に諸氏の壯健と母校の發展を祈りつゝ。

編輯者記 御言葉の通り校友諸氏と學校との連絡機關の出現は校友諸氏一般の御望であらうと存じます。實際私共が在學中遊説などに行つて地方の校友方から始終承つて

居たことは斯うした雜誌の發行に就てありました。併し御安心下さいそれが今漸く現實として現れました。

唯だ願慮されるのは私共の不熟練を以てしてこの程度まで諸氏の御期待にそふことが出来るかの問題です。兎に角最善を盡して編輯に従事する決心はして居りますが何よりも校友諸氏の御助力と御鞭撻に俟たなければならぬと存じます。尚ほ何事によらず此の種の御消息をお寄せ下さらんことを校友諸氏一般にお願ひ申します。

告

本年度卒業新校友諸君にして現住所不明の爲め本誌に掲載し得なかつた向及現住所氏名共全然洩れてゐる方があつたならば、本人又は其の知己の方から當學報局宛てに御報知願ひます。尚本誌に記載しある向にても若し誤謬があるやうでしたら之亦御一報願ひます。

本學校友會大阪支部 春季懇親會

五月二十八日午前九時湊町驛前に集合した本學校友會大阪支部員は、同二十分團體として鳥羽行列車に乗り込み、午前十時半法隆寺驛に下車した。其處より順路徒歩にて法隆寺に至り寺院の一部を借り受けて一先づ休憩、簡単な晝食を終へた後、寺僧の懇切な案内にて寺内を隈なく參觀した、それから一行は奈良に向ひ、午後三時頃奈良俱樂部(縣公會堂)に落ち付いたが、休憩室に當てられた俱樂部南隅の大廣間には、三笠山上より吹き下す晚春の涼風が流れて氣持よい事夥しい、かうして一行が休息の間に餘興として催された奈良

名物の鹿寄せはこの行に新しい興趣を添へ、聴て準備のなつた懇親會場に通されたのは午後四時頃であつた。校友有志数名の校歌合唱、砂川支部長の報告を兼ねた挨拶に會は始まり會員が盡きせぬ歡樂の中に閉會されたのは同七時半頃であつた。因に當日の出席者は左記の諸氏であつた。

- | | |
|--------|-------|
| 板垣不二男 | 伊藤眞雄 |
| 岩崎卯一 | 富田金三郎 |
| 和田相也 | 渡邊菊之助 |
| 柿崎欽吾 | 神田榮吉 |
| 神宅嘉壽恵 | 桂忠雄 |
| 吉村種藏 | 吉田音松 |
| 吉川孝太郎 | 垂水善太郎 |
| 田川七郎 | 武森武市 |
| 田伏市松 | 辻村政治 |
| 中村鄧次郎 | 内藤正剛 |
| 中川與之助 | 中村公男 |
| 中井彌六 | 村松岩吉 |
| 村尾靜明 | 室石常秀 |
| 上田操 | 野村吉藏 |
| 黒田莊次郎 | 黒川雲澄 |
| 山口房五郎 | 山内善二 |
| 安岡仲餘 | 山根瀧藏 |
| 松本標四郎 | 古田吉五郎 |
| 藤戸貞治郎 | 後閑宣太郎 |
| 小泉幸治 | 金貞次郎 |
| 後藤田徳太郎 | 寺岡清介 |
| 秋山卓爾 | 菊池金次郎 |
| 木戸卯之助 | 清成五六郎 |
| 木下孫一 | 湯原慶太郎 |
| 宮島綱男 | 宮森作造 |
| 三雲住三郎 | 三島律夫 |

- | | |
|-------|------|
| 島田菊次郎 | 白川朋吉 |
| 清水新造 | 平井繁男 |
| 森内楳吉 | 目代誠吉 |

關西甲種商業學校報

第七回卒業式

本校第七回卒業式は既記の如く去る三月二十日午後一時より關西大學の卒業式と共に第一講堂に於て舉行された。因に當日の受賞者は左記の如くである

- 成績優等に就き受賞せるもの
- 西村治三郎 日比野新五郎 西川浩一
 - 泉 幸三良 奥谷格治 中辻 審
 - 樋口捨一大江 潔
- 三箇年間精勤に就き受賞せるもの
- 樋口捨一 喜島秀太郎 梅澤良一
 - 久保田興士男 吉田伊三郎 谷口虎一
 - 兼松喜惣治 竹内 達

始業式

大正十一年度始業式は新入生二百餘名を加へて四月十日午前九時より本校校庭に於て催された。

教諭移動

新學年開始と共に左記三教諭の就任があつた。

- | | |
|-----|------|
| 教諭 | 中村秀光 |
| 助教諭 | 古川武 |
| 助教諭 | 三島律夫 |

春季修學旅行

- | | |
|-------|-------|
| 瀨川新太郎 | 砂川雄峻 |
| 鈴木秀人 | 須々木庄平 |

本年度春季修學旅行は左の如く行はれた。

- 第一學年 (五月十日) 黒川、引野、道端、山本各教諭引率の下に明石方面へ。
- 第二學年 (五月十一日) 室石、白石、三島各教諭引率の下に近江方面へ
- 第三學年 (五月十一日) 菊池、玉置、秋山、中村各教諭引率の下に吉野方面へ。
- 第四學年 (五月十一日) 神田、宮崎、島田各教諭引率の下に一泊にて伊勢方面へ。
- 第五學年 (五月十日―十四日) 小泉、後閑、中村各教諭引率の下に四泊にて九州方面へ。

本學年度體格検査施行

例年春期に施行される在學生の體格検査は岩田校醫初め教職員總掛りで去月八日午前八時半より施行された。午前中に三年級以上、午後二年級を終つたのであるが、その結果に就ては未だ詳報に接しないけれ共結果は一帶に良好の様な趣であつた。

度量衡に關する講話

度量衡に關する一般智識普及の爲め先般當地に大阪計量博覽會が開催されたが、其の後

も市の商工課では該智識の宣傳に努めてゐるので、關西甲種商業學校でも、生徒に度量衡の觀念を深からしむる爲め去る二十五日午前八時より第一講堂に於て度量衡に關する講話會を開催した。講師は市商工課の矢柴、小島氏であつた。

庭球部優勝

關西甲の庭球部！筆者が嘗て母校に在學中關西甲の庭球部云へば、關西の斯界に其の名を讃へられたものだ。然るに其の後今日に至る迄不幸にして其の令名に接することを得なかつた筆者が去月二十四日、新緑萌え出づる様な商品陳列所のコートに、遠來の強剛釜山商業と對戦して見事優勝した母校選手の活躍振りを目撃して如何許り喜んだことか！

思はず懐しい「フレール關西」のエールを高唱した筆者の心情は、讀者諸子が左のスコアに目を通さるゝ時、易々肯定されること、思ふ。即ち

金山商業(負)	本校(勝)
池田 二	三
吉田 三	一
花早 三	二
花早 三	二
藤島 三	一
藤島 三	一
藤島 三	三
藤島 三	三
吉新 〇	三
吉新 〇	三
吉新 〇	三
吉新 〇	三
花早 二	三
花早 二	三
花早 二	三
花早 二	三

優退組決勝

本大學擴張後援會に就て

近時世界の情勢は社會凡百の事物に改造を促し殊に國家存立の基礎は教育に在ることを痛感せしめ以て新文化の道程を暗示せるもの如し。此の秋に當り我が文教の府亦夙に世界の大事に順應し國運發展の基調を新大學令に置き以て大政一新の國策を樹立せらる。是に於てか我が關西大學も亦此の機運に乘じ組織を改變し内容を充實して我關西に於ける權威ある私立最高學府を爲し其の機能を發揮せしめんが爲め新大學令に準據せんす。

然りも雖も此の有意義なる事業の完成を期するの前提として本大學經濟的基礎の確立を計らざるべからざるこそ多言を要せず、而も微細の財源に其の費途を仰ぐが如きは到底之を許さざるのみならず新大學令準據の條件として法定の基金を保障し且つ諸般の設備を整齊し普く天下の學者を聘用して研究の目的を完うし教化育成の實を擧ぐるに遺憾なからしめんには茲に相當の巨資を要するを免れず。即ち本大學が曩に此の擴張計畫を公にし之を江湖の深厚なる同情と明正なる考察とに憑へんするや關西財界の巨頭山岡順太郎氏大に其の趣旨に賛同せられ率先して關西大擴張後援會を組織し自ら其の會長として力を之に傾注せられ以て今日に至る。爾來著々として效果舉り朝野人士の同情翕然として茲に集り本大學の財政的基礎漸く固きを加へ各種の設備亦大に進捗し所期の事業の完成を見ること必ずしも遠き將來にあらざるを憶はしむ。

即ち茲に同會を通して本大學の爲め多大の援助を與へられたる江湖諸人士の芳名を録して廣く學生校友其の他學校關係者諸氏に報道するに同時に深く謝意を表せんとする所以なり。

株式會社大阪鐵工所

宇治川電氣株式會社

- 内田 信也殿
- 範多竜太郎殿
- 井上 虎治殿
- 山岡順太郎殿
- 矢野慶太郎殿
- 加島安治郎殿
- 白杵善三郎殿
- 齋藤藤四郎殿
- 村田省藏殿
- 太田丙子郎殿
- 木村 清殿
- 下村耕次郎殿
- 池尾芳藏殿
- 香月錠之助殿
- 大阪毎日新聞社
- 木村 清殿
- 加福力太郎殿
- 濱地藤太郎殿
- 多羅尾源三郎殿
- 八木與三郎殿
- 安宅彌吉殿
- 前野芳藏殿
- 南 喜三郎殿

日本化學工業株式會社

- 堀田宗一殿
- 小田切延壽殿
- 八田兵次郎殿
- 本山彦一殿
- 林 安繁殿
- 矢野慶太郎殿
- 淺井義剛殿
- 阿部萬平殿
- 石崎震二殿
- 岡田永太郎殿
- 島村幡彦殿
- 山内 恕殿
- 中根經三殿
- 玉手弘行殿
- 增田正雄殿
- 泉 彌市殿
- 橘 尙藏殿
- 阿部嘉八殿
- 山岡 倭殿
- 寺井八三郎殿
- 澤村勇治郎殿
- 市村富久殿
- 井野清次郎殿
- 武藤山治殿
- 中村榮造殿
- 田附政次郎殿
- 鹿子木彦三郎殿
- 貴志喜四郎殿
- 國府一房殿
- 田中市藏殿
- 千浦友七郎殿
- 江村義三郎殿

因みに同會現任役員諸氏左の如し

- 會長 木村 清氏
- 幹事 宮島綱男氏
- 同 垂水善太郎氏
- 主事 野村吉藏氏
- 男爵 鈴木三郎殿
- 加福サダ子殿
- 林 蝶子殿
- 中田英太郎殿
- 尾形兵太郎殿
- 小松孔平殿
- 多賀谷庸三殿
- 磯邊助一殿
- 澁谷千里殿
- 笹子 謹殿
- 牧 義朝殿
- 宮富賢三殿
- 公莊惟篤殿
- 龜井寅太郎殿
- 住友吉左衛門殿
- 丑島光子殿
- 竹原友三郎殿
- 野村治一良殿
- 大島延太郎殿
- 市川誠次殿



雜錄

佛國大使クローデル博士
來校に就て

本大學が日と共に異常の發展をなしつつあることは本誌各方面の記事を通じて報道して居るころであるが就中茲に特記すべきは將來凡ゆる機會を捉へ内外の名士を招聘して其の講演を依頼し學生を課外に啓蒙せんことをこころである。而して其の第一歩として本大學教授官島綱男氏の斡旋により今回駐日フランス大使ポール、クローデル博士の來校を仰ぎ一場の講演を煩はすこととなつた。期日は五月二十七日であつて本號の原稿の締切までの間に合はないで本大學在つて以來未曾有の講演會の内容を本誌に掲載することの能きないのは残念であるが次號に於て其の詳細を報道する積りである。

高等研究科
主催第一回文化講演大會

本學高等研究科の内容に關して屢々報じた筆者は、更に同科の講演部に就て述べねばならぬ。

この講演部は同科生が新に企畫せる事業の一部で、今後は能ふ限り各方面よりの招聘に應じて隨時講演に出掛けるに同時に、同部主催の講演會も屢々開催して日頃研究の要項を發表し、辯舌の練磨に資する傍ら少しでも社會の啓蒙開發指導に盡瘁しやうと云ふのである。かゝる理想の下に生れた同部はその第一回文化講演大會を、去月二十一日午後六時より北大阪沿線豊津小學校の第一講堂に開催した。この大會は叙上の如き趣旨に加ふるに本學千里山校舎の新築記念として開催されたの

で、同地方人の歡迎凄まじく聴衆無慮一千に註せられた。定刻研究生秋山卓爾君が開會の辭を述べたのに續いてプログラムは左の如く進められた。

- 一 マンドリン合奏 音樂部員一同
 - 一 現代社會制度下の婦人 研究生 船越盛人君
 - 一 マンドリン獨奏幻想曲 音樂部員 占部文人君
 - 一 一人の力 研究生 山本哲應君
 - 一 ハーモニカ獨奏 音樂部員 武田君
 - 一 司會者の挨拶 研究生 糸島實太郎君
 - 一 マンドリン三部(インカルテオ) 音樂部員一同 阪東政一君
 - 一 バイオリンソロ 研究生 長巳經世君
 - 一 現代社會制度と教育 研究生 山中 剛君
 - 一 ハーモニカ獨奏 音樂部員一同
 - 一 マンドリン(オペランテックシンフォニー) 研究生 三島律夫君
 - 一 憧憬の社會へ 研究生 音樂部員一同
 - 一 マンドリン三部(イウモリスク) 教授 法學士 高木益郎氏
 - 一 法律の社會化 教授 法學士 岩崎卯一氏
 - 一 生存の悶 教授 法學士 岩崎卯一氏
 - 一 閉會の辭 研究生 柿原 拓君
- 絶わなんとして絶わざる媚々たる絃の旋律に、聴衆は只寂然として聞き入るかと思へば、聽て又一騎當千の辯士が咆哮する勞働問題社會問題に熱烈な共鳴の拍手を送り、高木、岩崎兩教授の眞摯なる講演には恍惚として魅せられてゐた。かうして最後に柿原君が閉會の辭を述べた時、近隣一帶の人口が盡く來集したと思はれる様な大聴衆は、この地未曾有の大盛會を稱へつゝ、且つは關西大學の前途を祝福しつゝ、歸途に着いた。
- 折柄千里山一帶に燃ゆる様な新緑の芳香は心地よい夜風に送られ、一行の口吟む朗々たる校歌の音と和して一大夢幻境を現出したかの感があつた。

關西大學 教科書専門
指定販賣
府立職工學校
他中等學校八校

明文堂野島書店

大阪市北區上福島北三丁目
電話土佐堀一二八六番
振替大阪三九九九一番

大阪書店中唯一ノ本校々友切ニ諸彦ノ御愛眷願ヲ祈上候

本學の

文房具

文房具と云ふ文房具は
ノートも總て精良で安い
ノートは校紋入りに限る

給品部

制帽、雜貨
食料品
校内雨天運動場内

祝 創 刊

關西大學指定御用達

●長谷屋號ハ上等洋服ノ専門店ナ
リ

●長谷屋號ハ羅紗販賣及ビ御註文
同様ノ既製品アリ

大阪市上本町六丁目

長谷屋號洋服店

電話 南四五二二番
振替大阪五五三八番

◆釣鐘町支店

◆今宮支店

商 品 目

- 一 ブラジルコーヒー粉末、罐入、煎豆
- 一 コーヒーシロップ
- 一 ビ ノ (清涼飲料水)
- 一 平野サイダー
- 一 リネル平野水

南米ブラジル國サンパウロ洲
政府專囑コーヒー發賣所

大阪市北區堂島濱通二丁目一番地

株式會社 カフエーパウリスタ

大 阪 支 店

電話長北三七六五番

祝 創 刊

如何なる皮肉家も御來店の上

御解決あれ

關西大學
甲種商業 指定

西區京町堀上通三丁目

難波洋服店

電話土佐堀二六三三五番

藝術的寫眞

(遠近ニ拘ラズ出張撮影モ致シマス)

大阪市北區上福島中一丁目福島座隣

歌橋寫眞館

電話土佐堀二七五一番

祝 創 刊

皆さんのお靴はゼヒ

學生靴
専門の

山本靴店へ

舶來キツト A、拾參圓 B、拾圓
同ボツクス A、拾圓 B、八圓

大阪市北區上福島北一丁目
(但淨正橋筋大和田銀行前)

法律でも

アナタの帽子はゼヒ

専門ニ限ル 名も品も新らし屋へ

帽子でも

關大指定

大阪北區上福島淨正橋通
阪神踏切南延命館南隣

オノト生活

簡易生活、能率生活、文化生活、いろいろの意義ある生活をつつくるめて總べての問題を解決するのはオノト生活

オノト万年筆

金八圓以上

オリオン万年筆

金參圓五拾錢以上

アルピオン万年筆

金五圓以上

ウォーターマン万年筆

金五圓以上

万年筆用アテナインキ金四拾錢
送料各金拾八錢



大坂市東區博勞町

丸善株式會社

(振替大坂七四番)

仙臺 | 福岡 | 名古屋 | 横濱

京都 | 神田 | 東京

昇格

◆關西大學生募集

今回昇格認可ニ付大學豫科第一學年生左ノ通り募集ス

●募集人員 八十名

●受験資格 中學校第四學年修了者
中學校商業學校卒業者

●願書受付期日 大正十一年六月十六日
午後五時迄

●試験期日 同 六月十七日
十八日

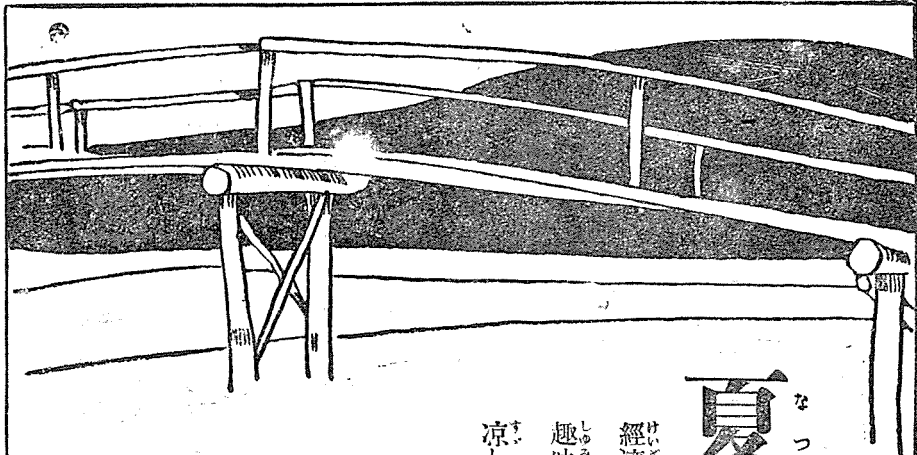
●試験科目 英語、國漢、地歴、數學

●試験場所 市外千里山新校舍

詳細ハ本學ニ就テ承合セラルベシ規則書郵券ニ錢添付ノコト

大阪福島 電話土佐堀一〇四九番
關西大學

第一回募集



夏を涼しく

経済と實用とは……吳服雜貨均一大賣出し
 六月一日より十二日まで
 六月十一日より廿一日まで
 趣味と流行とは……三彩會 織染展覽會
 六月十五日より廿七日まで
 涼しきお家構には……夏座敷用具陳列會

六月の三越

三浦秀之助氏南洋將來品展覽會	森陶華園萬古燒展覽會	池上秀畝氏小品畫展覽會	懸賞藝術寫真展覽會	吉田博氏山嶽油繪展覽會	京都金工會工藝品展覽會	阪田耕雪氏能繪展覽會
一月一日より	六月八日より	六月十四日より	六月二十一日より	六月廿七日より	六月廿九日より	六月三十日まで

◇日休定◇
 =日五十・月十=

大 阪

 三越呉服店

